

## □ 作曲

## 石塚潤一

多くの方々にとってそうだったように、芸術音楽の創作においても2020年は最悪の年であった。もちろん、年始の時点では、このような年になるとは誰も想像してはおらず、現代音楽の創作も、工藤あかね・松平敬コンサートで高橋悠治新曲(1/12)、フラックス・カルテットが新作を含む一柳慧の弦楽四重奏曲を全曲(1/18)と、ベテランの新曲初演から滑り出していた。しかしながら、1月16日、中国武漢への渡航歴のある神奈川県在住の30代中国籍の男性が新型コロナウイルスCOVID-19に感染していることが判明。2月13日には、神奈川県在住の80代の女性が、このウィルスで初めての犠牲者となった。

それでも当初は、日本より1か月先んじて感染被害が広がった韓国の状況を、「対岸の火事」と見るような嫌らしい余裕もあり、2月3日より横浜港に停泊中であったダイヤモンド・プリンセス号の中でのクラスター発生も、日常とは隔絶した局所での出来事のように受け取られていた。以下、感染状況に新作の初演状況を併記していく。チューバ奏者：橋本晋哉のリサイタル(夏田昌和作品を初演)と中野和雄の個展(2/5)、チェリスト山澤慧が、オペラシティB→Cにて、このシリーズでも異例といえる、6人の若手の新曲をパッサに挟む形で委嘱初演(2/18)、昭和音楽大学の「日本のオペラ作品をつくる～オペラ創作人材育成事業」では、茂木宏文、竹内一樹、藤代敏裕、永井みなみの作品が、部分的にはあるが試演され、同日にはアンサンブル・ノマドによる、坂田直樹、松平頼暁の新作を初演(2/28)もあった。

しかしながら、2月21日に日本国内での感染者数の総計が100人を超え(ダイヤモンド・プリンセス号内感染者を除く)、同27日には内閣総理大臣安倍晋三によって、全国小中高校への臨時休校(3月2日より)が要請された。この頃から延期/中止となる演奏会をはじめ、開催される場合も、場内物販やプログラムの配布を行わないなど、手探りの対策が採られはじめた。マスク着用の有用性についてすら、確たるエビデンスが無かった時期である(その後、理科学研究所のスーパーコンピューター富岳を用いたシミュレーションで、不織布マスクの着用に感染抑制効果があることが示された)。井上郷子のリサイタルで松平頼暁(3/1)、ヴォクスマーナが稲森安太己、田中吉史、伊左直直(3/5)、日本作曲家協議会(JFC)はピアニストの大井浩明を招いて、門脇治、牛島安希子、上野耕路、松本祐一を初演(3/15)。川島素晴が自身の肉体を楽器として扱った特異なコンサート(後閑綾香を初演3/24)の同日、オリンピックの一年延期が発表され、以後、7月までコンサートのない日々が続いた。

俳優の星野源が「うちで踊ろう」を発表したのが4月3日。同7日には、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、福岡県の7都府県に緊急事態宣言が発出された(5/25日には全ての都府県で解除)。芸術音楽の世界もリモートでの小さなイベントが中心となり、ZOOMを使ってクラシック/現代音楽の専門的なレクチャーを行う庭園倶楽部のような団体が生まれた(初回4/25)。東京オペラシティのコンポーザムの延期、NHK交響楽団が尾高賞受賞曲(2020年は細川俊夫)の披露を兼ねて行うMusic Tomorrowの中止など、影響は大規模公演だけでなく、国内での新作委嘱活動の屋台骨を支える当欄の常連の活動にも及んだ。たとえば西川竜太は、ヴォクスマーナの公演は継続できたものの、アマチュア合唱団4団体の公演は行えず、各団体1作品、計4作品の委嘱新作初演が宙に浮いた。合唱はコロナ禍においてとりわけ大きな影響を被ったジャンルで

ある。低音デュオは、4月に予定されていた公演を延期(松平頼暁、根本卓也、伊左直直を初演12/23)。東京現音計画は、作曲家の森紀明をプロデューサーに据えた公演を延期。打楽器の會田瑞樹も、自身のオペラシティB→Cへの出演公演が延期(藪田翔一、細川俊夫を初演11/30)となった。

7月に入ると、感染第二波が押し寄せてはいたが、会場の定員を席数の半分に制限した形で、テラホラとコンサートが再開された。政府は7月22日から「Go Toトラベル」事業を断行。しかしながら、通常のクラシック公演と同様、海外からの音楽家の客演は難しく、特に管弦楽で、出演者や曲目の変更が目立った。8月の下旬に開催されたサントリー・サマーフェスティバルでは、国際委嘱シリーズのテーマ作曲家：イザベル・ムンドリーが来日できず、2公演と1レクチャーが延期に。一柳慧をプロデューサーに迎えた回は無事に開催され、森田花(8/22)、山根明季子、山本和智(8/26)、川島素晴、杉山洋一、一柳慧(8/30)の作品を初演されたが、一部公演ではソーシャル・ディスタンスをとった異様なオケ配置を目の当たりにした。芥川也寸志サントリー作曲賞の本選会では、坂田直樹の新作が初演され、小野田健太が受賞の栄に浴した(8/29)。

9月以降、アンサンブル・ノマドが高橋悠治新作(9/15)。川島素晴が木ノ脇道元を主役に据えての個展を開催し、新作も披露(9/17)。なお川島は、8月にも「無音」をテーマとしたコンサートを開催し、自作とささきしおり作品を初演した(8/1)。ヴォクスマーナが、大熊夏織、伊左直直新作(9/29)。サクソフォンの大石将紀のリサイタル(10/2)で8作品、アンサンブル・ノマドが岸野末利加、渡辺裕紀子、権代敦彦新曲(10/9)、JFCが現代創造Tokyoと吹奏楽の新作を8作品(10/14)、チェロの山澤慧が北爪裕道、梅本佑利、山邊光二新作(10/21)、山田岳が有馬純寿と組み木下正道新作(10/30)。11月には、新国立劇場での藤倉大のオペラ《アルマゲドンの夢》(11/15.18.21.23)4公演は無事開催されたが、オーケストラプロジェクトのように延期となった公演も存在する。日本現代音楽協会(現音)はフォーラムコンサートを2日間開催し12作品の初演を含む14作品(11/26, 27)。12月には、東京シンフォニエッタの武満徹の特集で川島素晴新作(12/3)、現音作曲新人賞(審査員長：久留智之)は、岡本伸介、紺野鷹生、根岸宏輔、室元拓人、山田大貴が賞を競い、根岸が受賞(聴衆賞も12/4)、現音のペガサスコンサートでは、松平敬が鈴木治行を(12/7)、本條秀徳郎が伊藤彰(12/8)を初演。鈴木治行は、個展を開催しここでも新作を初演(12/16)、その翌日には佐原詩音が個展を開催(12/17)。横浜のJust Composedでは稲森安太己の初演があった(12/14)。

もちろん、ここに紹介したのはほんの一部に過ぎず、中堅女性作曲家サミットを主催する作曲家：渡辺裕紀子によれば、2020年には、121人の邦人作曲家の作品が初演されているという。もともと、多くの観客に恵まれていない芸術音楽、特に現代音楽は、コロナの影響をさほど受けなかった、という皮肉な見方もある。しかし、それはどうだろうか。昨年、久々に街に出たとき、あつたはずの店(特に居酒屋)が閉店している、という経験をした方は決して少なくはないはずだ。既に示したように、芸術音楽創作の「活況」は、多くは演奏家個人レベルの、手弁当での活動によって担保されているのが実状である。よって、ちょっとした収益性の変化によって、街の居酒屋のように知らぬうちに潰えてしまう脆弱性を孕んでいる。減った収益を配信などのサービスによって補う試みもされているが、活動の持続可能性を担保するほどの収益を配信のみから得るのは、まだまだ難しいのが実状である。

なお、2020年には、蒲池愛(5/30)、服部克久(6/11)、田中利光(7/30)、永富正之(12月)の各氏が逝去され、海外からは、ラインベルト・デ・レーウ(2/14)、チャールズ・ウォリオン(3/11)、クシユトフ・ペンデレツキ(3/29)、リチャード・タイテルバウム(4/9)、ニコライ・カプースチン(7/2)、エンニオ・モリコーネ(7/6)、姜碩熙(8/16)の訃報も届いた。